

子どもたちの顔を一人ひとり、
一日の、ほんのわずかな時間でいいから、
心を込めて見つめてあげよう。

I

良い
母親
って何だろう

良い子育てをしている母親を探し求めている、若くて聡明な女性がいました。

上手な子育ての秘訣を知りたいと願っており、またそのような秘訣は、実際に良い子育てをしてきた人から学ぶしかないということを知っていたからです。

お腹に赤ちゃんがいるこの若い女性は、どうすれば上手に子どもを育てられるか、夫とじっくり話し合ったことがありました。でも考えてみると、いままで、この夫婦は二人とも、子育てについて実際に教わったことがなかったのです。それなのに、子どもが生まれてくる日は目の前に迫っています。

そこで二人は、それぞれの方法で独学することにしました。

彼女は勤め先から特別休暇をもらって、赤ちゃんが生まれてくるまでの間に、いろいろな母親に会って、どのような子育てをしてきたかたずねたのでした。

数か月の間に、たくさん女性の性と話をしました。若い人や年とった人、主婦業に専念する人や外に働きに出ている人、子だくさんの母親やひとりっ子の母親、夫のある人やひとりになってしまった人、よちよち歩きの幼児を育てている人や一〇代の子どものいる人、一心に子育てに取り組んでいる人やユーモアの心を失わずにやっている人など、いろいろなタイプの母親がいました。

子育てにも、ずいぶんたくさんやり方があることが、わかりはじめてきました。

話をしてくれた母親たちが、わが子のこととどんなに心を痛めているかも、よくわかりました。みな良い母親になろうとして、懸命に努力しているのです。

しかし、多くの母親が目をそらそうとしていることもありました。子育ての失敗が生み出した結末、とでもいえましようか。それは、反抗心とか無関心にとらわれている子どもたちのまなこであり、悲しみとやりきれなさを胸に抱く親たちのまなこです。見聞きしたものの大半は、好ましくないものに思えました。

でも、きつと良い方法があるはずだと思います。

家庭にあふれる愛や平和や喜びは、上手な子育ての成果だということを知っていました。それは親にとっても、また子どもにとっても好ましいことなのです。

より良い方法を見つげようと、彼女は心に決めたのでした。

彼女は「きびしい」母親、すなわち、わが子を厳格にしつける母親をたくさん見ました。確固たる信念と一貫性をもって子どもをしつけることに最大の価値を置いているのです。友人のなかには、こういうタイプの母親こそ立派な母親であると思い込んでいる人もいます。

ところが、子どもたちの多くはそうは思っていないませんでした。

「きびしい」母親の家を訪れて、彼女は「ご自身のことをどんな母親だとお考えですか？」とたずねました。

返ってくる答えは、表現こそ違え、似たようなものでした。

「私は規律を重んずる親です」とか、「昔ふうの親です」とか、「伝統を大事にしています」とかです。

その話ぶりからは、わが子の行いに対する深い関心と誇りが読み取れます。

この若い女性はまた、自分の子どもの感情を何よりも大切にしている、いわゆる「ものわかりのよい」母親にもたくさん会いました。

すぐれた理解力があり、思いやりもあるように見えるので、こういう人たちをたいへん



良い母親だと思い込んでいる人もいました。

ところが、子どもたちはといえば、そういう母親に対して、まったく異なった感情を抱いていました。

「ものわかりのよい」母親にも、膝をまじえて話を聞き、「ご自分をどんなタイプの親だとお考えですか?」という質問をしました。すると「現代的な親です」とか、「理解のある親です」とか、「力になってやる親です」という答えが返ってきました。

その口調からは、わが子の自尊心に対する関心と誇りが読み取れました。彼女の頭は混乱する一方です。

世の中のたいていの母親は、子どもの行いか、子どもの自尊心か、そのいずれか一方にしか関心がないように思えたからです。あれか、これか、なのです。

自分の子どもに良い行いをさせることに関心のある母親は、どうも「権威主義的」で「専制的」だし、子どもに自尊心を求める母親は「甘い」親のように思えてしまつた。

この若い女性は、どちらの母親 「権威主義的」な母親も「甘い」母親も のやり方も、限られた面でしかうまくいっていないのではないかと考えました。いずれのタイプも、最善を尽くして子どもを育てているのはそのとおりなのですが、「でも、これでは母

親として半人前ではないかしら」と考えてしまつたのです。

近くのある町をたずね、さらに母親たちと話を交してみました。まったくの徒勞でした。疲れ果て、失望して、理想の母親探しの旅から帰ってきました。

すぐれた母親をたずねようなどという気持ちは、とっくに捨てていてもおかしくはなかったのですが、そうならなかったのは、彼女には一つの大きな強みがあったからでした。それは、自分の探し求めているものが何であるか、正確に把握していたことです。

しばらくあとで、夫にいいました。「ほんとうにすぐれた母親というのは、この世でいちばん良いものを手に入れるすべを知っている人のことじゃないかと思うわ。どうすれば自分自身を受け入れて大切にすることができるか、またどうすれば自分で正しく行動できるのかを、自分の子どもに教えられる人だと思うの。」

それから、たぶんこれはもつとも重要なことだと思つけれど、そうした子育ての過程を自分自身も楽しむことを知っている人じゃないかしら」

つきからつきといるいろいろな人と会い、話しているうちに、とうとう、ある行動的な女性についての素晴らしいAを耳にして興味をそそられました。年配のその婦人は、人生を楽しんでおり、どんなときでもいつも時間を都合してしまふ人だということでした。

彼女の関心を引いたのは、その年配の婦人が、なみはずれた母親であるという点でした。それも信じがたいほど単純で、かつ効果的な子育て法を体得した人である、という事実だったのです。

Aに聞くその婦人は、はた目には、たいして苦勞することなく、三人の子どもを立派に育て上げたというのです。三人の子どもはそれぞれ行いのすぐれた子どもたちでしたから、いまでは分別のある、裕福で幸せな大人になったたとのことです。

成人した三人の娘には、それぞれ子どもがいました。そして同じ子育て法を用いて、同じような成果を上げていたのです。

そんな話ってほんとうにあるのだろうか、と若い女性はいぶかしく思いました。もしほんとうなら、その秘訣を分けてもらえないものだろうかと考えました。

電話帳で調べて、その婦人に電話をしました。

「たいへん良い子育て法をご存じとうかがいました。一度おじゃましてお話をつかがたいのですが……」

「どうぞどうぞ。そんなふうにいわれると恥ずかしくなりますが、いつでも喜んでお会いしますわ」